
転落人生

まったりorz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転落人生

【Nコード】

N2153B

【作者名】

まったりorz

【あらすじ】

有名進学校に入学した少女の初めての挫折、苦悩。そしてそこから得たもの。思春期にありがちな葛藤をテーマにしています。

ただ悲しいのです。

自分が生きていることが。

ただ悲しかったのです。

【転落人生】

十六になったばかりの秋でした。

私は絶望していたのです。

報われない努力なんてないと思っていました。

とはいえ、私は努力というものをこの短い人生で、したことはなかったのですが。

私の人生は、挫折を知らないものでした。

物心ついた時から、全て人並み以上にこなせていた私は、この学区では一番のレベルを誇る高校へと合格しました。

そこまでは、良かったのです。

この新しい小さな社会で、私は打ちのめされたのです。

それぞれの中学からやってきたトップの生徒の中では、私は中の下でした。

その時は、勉強しなかったからだろう、と自分に言い聞かせることが出来ました。

そして、勉強しよう、と思いました。

この高校では、教師も生徒も、偏差値で人を判断するのですから。

- - - 勉強して、成績があがらなかったら??

そんな小さな不安を抱えながら、私は必死に寝る間も惜しみつ勉強したのです。

不安は的中しました。

私の成績はこれといった変化は見せませんでした。

今考えてみれば、この学校では、私がどんなに勉強しても、周りも同じくらい、いえそれ以上に勉強しているのだから当然だったのです。

「お前、ちゃんと勉強しろよ。」

教師のその言葉は、今度は私に深く刺さりました。

その教師は、前のテストの時、

「お前は頭良いんだから、ちゃんと勉強すればもっと上にいけるだろう？」

と私を励ましたのです。

私はちゃんと勉強しました。

ちゃんと努力しました。

そんな自分の能力自体を否定するような、教師の期待を侮蔑に変えるような言葉を発する自信は、ありません。

私は、へらへらと笑う事しか出来ませんでした。

学校内での私に対する「落ちこぼれ」という蔑視と
学校外でのまわりの私に対する「秀才」という勘違い、
その温度差は、私に重くのしかかりました。

私は、もはや私が何なのか、わからなくなっていました。

もういやだ。

もう、疲れた。

私は高校初めての夏休みに、初めて煙草とお酒を経験しました。

一時の逃避には、ちょうど良かったのです。

毎晩のように、中学のころの友達とカラオケやクラブに行き、酔っ払い夜を明かしました。

もちろん、それと同時に朝起きれなくなり、夏休みの課外授業や補習には、行かなくなっていました。

今まで勉強に割いた時間は全て、酒、セックス、混沌とした物思いに変わりました。

もちろん、私になんらかの期待をよせていた両親の動揺は凄いものでした。

学校へ行け、

友人関係が悪いんじゃないか、
躰をどこで間違えたのか、

私が変わった原因を必死で探しているようでした。

私は、学校に無理やり行かされる事は、死に追いやられることと同様に感じていたので、

わめきたてる両親に絶望し、憎みました。

結局、今の私は、何か間違った存在であって、
本当の私じゃないと、いうのでしょうか？

若いうちしか出来ない事がある。

勉強が全てじゃない。

そんな言葉を並べ立てたところで、得体の知れない恐怖感のようなものは消えません。

黒く、もやもやとしたそれは、深く広く染み込んでいくばかりです。

結局、空白のまま、時間だけは足早に過ぎ、さらに私を追い込むの

です。

私はいつも力無く笑い、たまに学校に行ってみては、やはり自分の居場所がないことに愕然とするのです。

今の私には、足場を無くし、ふわふわと宙に浮いたような、自分という存在すら、曖昧な、不安定な絶望しかありません。

私はひたすら自分の居場所を探していたのです。

そしてそれは私を支える足二本、たったそれだけの足場だけで、十分だったのです。

しかし、私はその小さな足場を見つけるだけの努力をすることすら恐ろしいのです。

もし、そんなもの自体存在しなかったら？

生まれながらにして、人の置かれる環境は平等ではないのですから、私には地に足を置く権利すらないのかもしれませんが。

私は、夜毎にさ迷い歩きました。

星の代わりにネオンの輝く街を。雑踏を。

私は自分に絶望していました。

私を形成するものは、劣等感と諦めと自己嫌悪だけです。

知らない男に何度も手を引かれ、
薄っぺらい体温を感じ、

ああ、私はまだちゃんと此処にいるのだ、などと思い、
夜明けと共に、またどうしようもない感情にさいなまれるのです。

何度自分の存在を確認したって、それは自分の抜け殻でしかないのです。

進学校とは不思議なもので、
私がテストでどんな点数をとっても、
いえ、テストすら受けなくても、
進級が出来るのです。

ただ、この学校に私のような前例がなかったからかもしれませんが、
三年になった秋、私は最早、ここで存在を認識されないようになっていました。

教師は、私が遅刻をして教室に来て、ちらりと目をやるだけで、
そのまま授業を続けます。

授業中に問題を当てられることは皆無です。

私は、無性に笑いたくなります。
何がおかしいのかはわからないのですが。

なんだか懐かしい匂いのする教室。

机につつぶして、笑い声を必死にこらえます。

残り少ない高校生活。

私はこの場所で、何をすることが出来たのでしょうか？

私がどんなにもがき、焦り、わめいても、そんな事おかまいなしに、時間は淡々と過ぎました。

隣に座る生徒は、大学受験に備え、日々精進しているようです。

私は、誰にでも平等に与えられるのは時間だけだと思いました。

私はその平等な時間すら苦痛に感じる性分の方なのですが。

虚しいだけの私の日々、
いつか、自分は選ばれた者だと思っていた、

自分の居場所があることを信じて疑いもしなかった幼き頃を、とても懐かしく思いました。

それすら私の虚しい気持ちを大きくするだけです。

私は終業を知らせるチャイムと同時に、教室を、学校を後にしました。

早退して家に帰れば、親がうるさいので、駅までのみちをぐるぐると何度も回ります。

久しぶりに通った道は、私に何の感慨も与えません。

私は、死んでいるんじゃないだろうか、となんだかまた笑えてきました。

そのときです。

携帯電話が鳴り響きました。

母親からでした。

無視しても何度も何度もかかってきます。

「あんたどこにいろの？先生から電話あったのよ。学校と反対方向に歩いていくのを見たって！」

私は素直に今居る場所を伝えます。

「今から、迎えに行くから、そこにいなさい！」

プツリと電話は切れました。

ぼんやりと考えます。

母は電話で、先生が心配して電話をよこしたといました。しかし、その先生とやらが心配したのは、私の身の上なんかではなく、

こんな時間に校外を制服でうろろろする生徒がいることにより、学校の体裁が悪くなることでしょう。

そしてきつと母親も、、

十五分後、母親の車が到着しました。

母はなにもいいません。

私は怒っているのだろーと思ひ、無言で助手席に座ります。

車は、いつもとは違うルートで、沈黙を孕んだまま進みます。

くねくねとした山道に入り、人気のない緑の影に、

「××精神病院」という看板が見えました。

私は、ドクン、と胸が鳴ると同時に、

死人同然の私には仕方がない、と思いました。

車はゆらゆらとカーブを切って走って行きます。

私たちが辿りついたのは、病院ではありませんでした。

幼い頃に何度か行つた事のある河内でした。

赤い鉄橋の横に車を止め、母はじつと視界に広がる池を見つめます。

「なんでここに来たの？」

母の不可解な行動に思わず訊ねました。

「たまには、息抜き。」

私は、母親の不器用な愛情を感じた気がしました。

私達は、いつの間にか他人になってしまっていたのです。

母は、私が何を思い、何にもがいているのか、全く理解できないのです。

私も、母が、何を考え、どう生きているのかは、わかっているようで、きっと本質は何も知らないのです。

それでも、きっと私達は家族なのです。

私はそっと母を見ました。

いつも見慣れているはずのその顔は、少し、老けてみえました。

もう、私は、母に対して無邪気に甘えたり、素直に助けを求めたり出来る程、子供じゃなくなっていました。

母は、車を降りて、群がる鳩たちにパンをちぎってやっていました。

私は、自分が大人になった時を想像してみます。
母はきっと今以上に年老いてしまうのでしょうか。

そしていつか、居なくなる時もあるのでしょうか。

そう、人間の時間は限られているのです。

そして、その限られた時間の中で、私はあと何回、母を怒らせ、悲しませるのでしょうか。

漠然とした、不安のようなものが湧き上がります。

そうです。

私はどこかで気付いていた事を確信したのです。

私が、居場所を無くしたのは、学校でも親のせいでもなく、自分自身なのです。

私は、優越感と虚栄心の固まりだったのです。

それを打ち崩され、自分を支えるものが無くなったような気がしていたのです。

自分は何でも出来る、人より優れている、

そんなちっぽけなプライドが、

私をすべて支配していたのです。

そしてそれを失った瞬間、私は死んだのです。

壊れたものは戻らない。

それでも私は空っぽな自分の中に壊れたものを必死にかき集めようとしていました。

そう、私は、今、居場所ではなく、ゼロの状態から自分を支えるものを探さなければならぬのです。

居場所なら、初めからちゃんとあったのですから。

私は車を降り、まだ日の高い空を見上げました。

FIN

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2153b/>

転落人生

2010年11月14日03時15分発行